

## 長寿命社会と学会

副会長 秋葉重幸



寿命が延びて医療費や年金が増大し続けているという課題もあるが、健康寿命も延びて70歳を超えている。若年労働者数が減少していく中でそれを補う労働力として期待されている面もある。これから生まれてくる子供の半数は100歳を超えるまで生きるだろうと予測している国もある。100歳まで生きることが当たり前になると、70歳まで現役で働くことも当たり前になるとして、それでもまだ30年もある。皆さんまだ学会に在籍しているだろうか。まさに、その30年は学会が頼りになるのではないか。なぜかと言えば、人は学び続けるからである。そうあって欲しいという願いでもある。

働き盛りの人は仕事をしながら学ぶ、あるいは学びながら仕事をするといった場面が多いと思うが、仕事が学びになっている人は幸せではないかと思う。飛躍かもしれないが、多くの場合、学ぶことは幸せなのである。食べ物と暖かい住まいと教育があれば暴動など起こらないとよく言われる。教育を学びの機会と考えれば、やはり学ぶことは幸せに通じる。もちろんある程度良好な健康状態や家族状況などは前提となろう。そう考えれば、また一足飛びではあるが学会の会員の皆さんは幸せのはずである。実態は必ずしもそうっていないかもしれないが、学会に入会すればちょっと（1か月1,000円）の会費で幸せになれるなどと宣伝すると、勘違いされるかも知れないが、こういった側面を宣伝する活動が少なすぎるようにも思える。今の世の中には技術があふれている。多くの人は、特に本学会員の皆さんは年齢を問わずいろいろな技術について学びたがっている。実際、企業に勤務する会員の方に聞いてみると、仕事と直結する技術内容については商業誌なども含めていろいろなメディアから知識を得ているようだが、仕事以外の分野の技術に関してもいろいろと知りたいという要望が強い。現在の学会活動や会誌はそれに応えられているとは言い難い。

本会を含む「学会」は、「学問や研究の従事者らが、自己の研究成果を公開発表し、その科学的妥当性をオープンな場で検討論議する場である。」と位置付けられている。もちろんこういう学問や研究の専門家集団の集まりという面は大事にしないといけない。しかし、一般の会員の方々、特に高齢の会員や企業に勤務されている社会人会員の方々の中には、必ずしも学問や研究に携わっていない方々も少なくない。あるいはかつては携わっていたが遠ざかってしまった方々も多いのではないか。そういう方々にも会員にとどまって頂くためには、学会とか集まりの側面をもっと押し出す必要があるのではないか。

会員の動向で言えば、学生員と海外会員は増えているが全体としては減ってきている。こういった状況の中で、学問や研究の専門家ではない企業会員や高齢の方々にも親しみやすい学会を目指す努力がこれまで以上に必要とされているのではないかと思う。元々学会や大学はサービス産業としての重要な資質を備えている。体系化された知識や人が集まる場を提供できるからである。もちろんお金を払ってでも受けたいと思うサービスにまで高める工夫はある。各研究専門委員会が開催する研究会や論文発行などはどうしても学問や研究の専門家の集まりにならざるを得ない。一方、総合大会やソサイエティ大会では学会活動を広く知ってもらおう場をもっと提供してもよいと思う。大きな期待を寄せたいのが各支部の活動である。ソサイエティや研究専門委員会の協力も含めた縦横の連携が重要である。長寿命社会で存在感が増していく学会になることを願っている。